

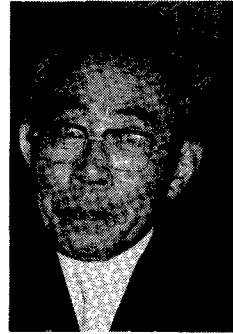
水津一郎先生を悼む

昭和33年、本会の前身である日本歴史地理学研究会の創設に参画して委員（評議員相当）に就任、昭和41年歴史地理学会と名が改まって以後も引き続き長年にわたって評議員として本会の発展に貢献し、わが国の歴史地理学界を主導された前奈良大学学長、京都大学名誉教授水津一郎先生は、平成8年4月8日、心不全のため不帰の客となられた。享年73歳であった。

先生は、大正12年1月1日山口市に生まれ、昭和21年9月京都帝国大学文学部（史学科地理学専攻）を卒業、昭和27年4月大阪市立大学講師に就任、同助教授を経て、昭和34年4月京都大学文学部助教授に転じ、46年教授に昇任して地理学講座を担任された。昭和61年3月停年退官、その間、昭和56年1月から2年間は、京都大学文学部長・大学院文学研究科長に任じられた。昭和61年4月奈良大学教授、昭和63年7月から平成6年3月までの5年9か月は、奈良大学学長を勤められる等、大学における教育・研究と大学運営に大きな足跡を残された。

学界にあっては、上記本会役員の外、人文地理学会会長（通算3期6年）、史学研究会理事長を歴任して会の充実・発展を指導されると共に、昭和60年7月から平成3年7月までの6年間は日本学術会議会員（第1部 人文地理学）として、学術行政に力を尽くされた。また、奈良大学学長勇退後には、故浅香幸雄先生の跡を継いで砺波散村地域研究所長に就任、若き日の研究フィールドに通う日々を楽しまれたと聞いている。

先生の研究は極めて刺激的で、深いものであった。その成果は、生活空間の結節システムに基づく地域論を展開した博士論文『社会集団の生活空間』（昭和44年）をはじめ、『社会地理学の基本問題』（昭和39年）、『地域の論理』（昭和47年）、『ヨーロッパ村落研究』（昭和51年）、『地域の構造』（昭和57年）などの大著としてつぎつぎと纏められた。それらは地域の形態・機能・構造を体系的に説き明かすという基本発想に立って、社会地理学・歴史地理学の地平を広げ、独創的な位相地理学を開拓されたもので、いわゆる水津地域論展開過程の全貌を見ることができる。この外、『近代地理学の開拓者たち』（昭和49年）では、グラートマン、シュリューターなど、先生の研



一九八八年一月一七日撮影

究に大きな意味をもったドイツの地理学者達が近代地理学を確立してゆく過程を、生き生きと描出された。

先生が京都大学に着任された年は、たまたま私が大学院に進学した年であった。先生の講義は重厚で例えばヨーロッパ村落の三圃制と耕区制をテーマとされた講義、基礎地域から局地、地方、国家、世界に至る地域発展のルールを主題にされた講義などでの、膨大な文献を踏まえた深い考察や、ドイツ語の或いは先生独創のさまざまなテクニカルタームを語られた際の印象は、いつまでもなつかしく思い出されるのである。先生ご着任のその年度、私は郡家とその領域に関するレポートを提出した。内容は評価して下さったが、末尾に数行付した弁解の文章に対して、「レポートも論文である。格調をそこなうようなこんな文章を加えるものでない」と、お叱りをうけたことがあった。学問的な文章に対するこのこだわりは、以後長く私の教訓の1つになっている。

先生の最後の著書となった『甦る地理の思想』をいただいたのは、昨平成7年の4月であった。ゲーテやダーウィンをも含む地理学史観をベースに、学生に「みずから納得できる理想をめざして独自の知見をひろめよ」と説く学長式辞を拝見して、先生のお元気に安堵してほだない。昨年末も、お好きなビールこそ多くはあがらなかったが、お元気だった。正月に少し体調を崩されたが、快方に向かっておられると人づてに伺っていた私は、電話口で絶句した。私にとってはもちろん、学界にとっても、まだ長くご指導をいただかねばならない先達を喪い、痛恨の極みである。心からご冥福をお祈り申し上げます。

（足利健亮）